



Interview

学習院女子大学長
大桃 敏行

良き伝統を継承しつつ

「国際化の推進」

「リベラルアーツ教育の充実」

「教育の質の向上」

三つを軸にさらなる発展へ

次代に向けて大切にしたいこと

令和3(2021)年4月に学習院女子大学長に就任しました。本学の良き伝統を継承しつつ、次代に向けてさらに発展させていくために、私は次の三点を大切にしたいと考えています。一点目は国際化に対応する教育の推進です。現在、コロナ禍により国境を越えた人の移動は制限されていますが、収束すればその流れは戻るでしょう。これまでも本学は、カナダの大学との同時授業や国際機関の専門家による講義などをオンラインで実施し、海外とつながるプログラムを展開してきました。今後もこうした取り組みに力を入れ、時代を先導する国際的な人材を育てていきます。二点目はリベラルアーツ教育の充実です。広い学びを重視するリベラルアーツ教育の意義を、今日的課題との関係で捉え直していきたいと考えております。三点目は教育の質のさらなる向上です。特に学生が自ら課題を見つけて解決する探究的かつ協働的な学びの実践を目指します。これら教育面の取り組みと同時に、卒業生や父母保証人の皆様との風通しの良い関係も大切にします。父母会などを通して多くの意見を伺い、未来への貴重な指針として活かしていきたいと思っております。

コロナ禍を越えて発展していくために

コロナ禍において本学は、学生や教職員の安全の確保と質の高い教育活動の継続の両立を目指して様々な対策を講じてきました。令和2(2020)年度の春学期の授業は開始

を二週間遅らせて、遠隔授業に必要な環境の整備やセキュリティ対策等を行ったうえで、Zoomを利用した授業を導入しました。遠隔授業の実施にあたっては、学生への支援金の給付やwi-fiルーターの貸与などの施策も講じました。また、遠隔授業の下で学生同士、学生と教職員間のつながりの場を確保するため「Linkingプロジェクト」というWeb上での交流を推進する取り組みもスタートさせました。秋学期は、対面と遠隔のハイブリッド型の授業も導入するとともに、中断していた短期海外研修もオンラインで一部実施しました。今後も状況の変化と学生個々の事情に配慮しながら、臨機応変に対応を進めていく所存です。とは言え学生が集ってこそその大学です。明るいキャンパスの光景が早く戻ることを願わずにいられません。このコロナ禍を乗り越え、本学が目指す教育と研究を実現していくためには、財政的な裏付けが必要です。皆様の深いご理解と継続的なご支援を賜りますようお願い申し上げます。



Profile 大桃 敏行 (おおもも としゆき)

昭和58(1983)年東北大学大学院教育学研究科博士後期課程単位修得退学。同大学院教育学研究科教授、東京大学大学院教育学研究科教授、同研究科長・教育学部長等を経て、平成29(2017)年学習院女子大学国際文化交流学部教授、現在に至る。令和3(2021)年4月学習院女子大学長に就任。専門は教育行政学。出身地は新潟県。

学習院の

名 情 景

第8回 大学図書館

キャンパスに遺る数々の馴染み深い場所をご紹介しますこのシリーズ。
第8回は、日本の近代建築の第一人者、前川國男が手がけた
「大学図書館」です。学習院の数多くの校舎建築に腕を振るった
巨匠の設計思想が、端正な建物の隅々に息づいています。



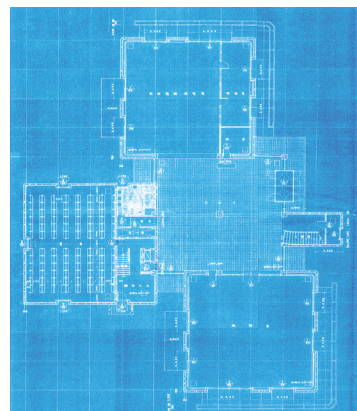
木立と調和しながら凛とした存在感を放つ大学図書館

昭和38(1963)年、開校85周年を記念して、目白キャンパスの一角にそれまでの常識にとらわれない新しい考えに基づく図書館が建てられました。一般的な図書館は、まず「静粛であること」を重視しますが、この図書館がめざしたのは、「学生の生き生きとした流れを導き入れて集いの場とする」こと。ねらい通りこの建物は、完成から60年近く経つ今も魅力的なたたずまいを保ち、多くの人を惹きつけています。

設計者は、20世紀建築界の巨人 ル・コルビュジェのもとで学び、帰国後は丹下健三とともに日本の近代建築をリードした名建築家、前川國男(明治38《1905》～昭和61《1986》年)。代表作の東京文化会館など、手がけた作品は国内外200以上に及びます。

前川と学習院の関係は、昭和33(1958)年に院長の安倍能成(明治16《1883》～昭和41《1966》年)が、人間のための建築を追究する姿勢に共感し、大学校舎群の設計を依頼したことに始まります。これを受けて昭和35(1960)年に中央教室(ピラミッド校舎)、本部棟、北1号館、南2号館が完成。その後も、南5号館や女子部の戸山図書館など、学習院の様々な建物を設計しています。

その一つである大学図書館には、前川建築の特徴がよく現れています。工法は、前川が日本で初めて建築に導入したコンクリート打ち放しを採用。設計面では、「単位空間の連結」という前川得意の手法がとられ、3つの正方形の棟をロビーを中心に配置しています。これにより、閲覧、収蔵、事務など性格の異なる用途に対応する空間を実現するとともに、将来の増築も容易にしています。また、壁



平面図から正方形の棟を組み合わせた建物であることがよく分かる

構造で作られた各棟は内部に柱がないため広々としており、仕切りを変えて柔軟に利用可能です。1階は「庭の延長」という考えのもと、学生の憩いの場となるロビーを設け、2、3階は落ち着いた読書スペースとして設計。屋上には日差しのもとで談笑できる休憩室が作られています。

時の経過と共に補修・改修が重ねられてきたこの建物は、間もなく図書館としての役割を終え、新たな活用を検討中です。図書館の機能を引き継ぐのは、令和5(2023)年に完成予定の新東1号館^{*}。最先端の知的活動拠点として高度な機能を提供しながら、「生き生きとした集いの場」という現図書館のコンセプトもしっかりと継承していきます。



広々とした空間を持つ2階の参考資料室(昭和40《1965》年卒業アルバムより)

^{*}正式名称は「東1号館」ですが、建設が完了するまで暫定的に「新東1号館」としています。

取材協力:学習院大学史料館 学芸員 富田ゆり 写真提供:学習院アーカイブズ、学習院施設部